

佐賀市 34 歴史探訪

かみ いずみ い せき し ゆ つ ど が と う 上和泉遺跡出土の瓦塔

瓦塔は、古代寺院などにみられる木造の仏塔をモデルとして造られたやきもので、奈良時代ごろから製作が始まり、平安時代に最も多く造られましたが、室町時代には衰退していきました。その用途については、経巻きょうかんや宝器ほうきなどを納めた厨子ずしとしての機能、木造塔が倒壊した後に用いられた代用品としての機能、覆屋おおいやなどの建物に安置された信仰の対象としての機能などが代表的な見解ですが、全国的に出土数が少ない考古遺物の一つであるため、不明な点が多いことも事実です。

上和泉遺跡で出土した瓦塔は、県内で初めての出土例です。奈良時代終わりから平安時代初め頃にかけての遺構から破片が折り重なった状態で出土し、破片をつなぎ合わせると、初重軸部しよじゆうをほぼ完全に復元することができました。一つの重じゆうのみであっても、これほど残存程度が良い瓦塔は九州でも少なく、大変貴重なものです。

今回出土した初重軸部の高さは約38cmです。全体の高さは2m程度になると推定され、これはちょうど人が軽く見上げる程度の高さになります。木造塔と比べると表現は簡略ですが、屋根を支える組物や柱なども表現され、柱の表現から方三間の建物を表し、表面には朱の痕跡がみられます。このように瓦塔はやきものであると同時に、ミニチュアの建築物としての側面をもっています。

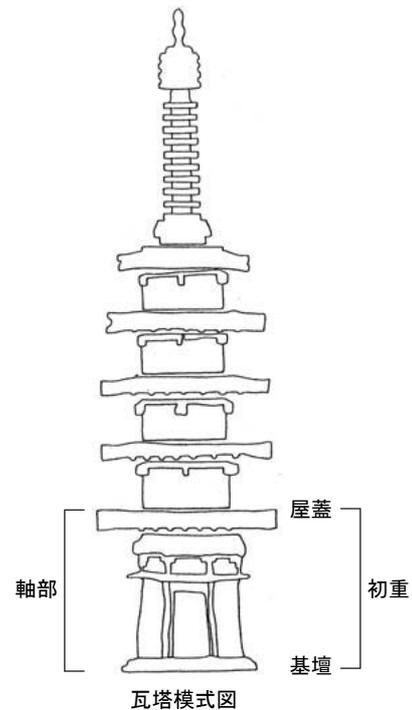
この瓦塔の出土は、当時の遺跡が数多く発見されている久保泉町上和泉周辺での仏教信仰の一端をうかがうことができる考古遺物ですが、寺院や建物内からの出土ではないためその用途は不明です。何のために誰が使っていたのか、謎のままなのです。

一口メモ

- ・今回紹介した上和泉遺跡の瓦塔は、佐賀市大和町の肥前国庁跡に保管しています。
- ・同資料館では国庁跡のガイダンス展示のほか、他遺跡からの出土遺物もトピック展示しています。



上和泉遺跡出土の瓦塔(初重軸部)



瓦塔模式図

